

# 西獨史學界の動向

— バイエルンを中心に —

増田 四郎

學界の動向というようなものは、遠く離れている場合に、かえってわかるような気がするものであって、ドイツならドイツの大學にとび込んでしまうと、何が新しい傾向であるか公平に判断しにくくなるように思われる。私の場合、ミュンヘンの個々の教授については、その各々の関心の中心をまとめることが出来るが、西ドイツの史學界の全體について、客観的な判断をくだすということはかなり困難である。まして東ドイツの學界ということになると、日本にいる時の方が、或る意味ではよくわかるという便宜がある。つまり、西ドイツの歴史家達は、「東獨の歴史家は大部分西に移ったのであるから、今日の東獨史家に、西獨史家と匹敵する立派な研究を期待することは出来ない」とあたまからきめてかかっている傾きが強い。東に残っている人達は、東がよいからではなくて、財産没収の危険とか親戚関係といった理由でやむなく残った人達であり、時の経過とともに、一層西への脱出が困難になったのだという風みにみている。それゆえ、毎日のように新聞が東西統一の問題を論じているにもかかわらず、西獨史家達の東獨史家への関心は案外薄いように思われる。また、東獨史家の著作ももちろんたくさん西獨の書店に出ているが、いずれも物凄い割引であり、ほとんど問題にされていない。事実、考え方としてわれわれの注目をひくものはあるが、研究の精緻さ、實證の深さといった点になると、残念ながら、西獨の出版物には遠く及ばないのが現状である。それでは西獨史學界で現にどんな研究が出ているであろうか。個々の新刊書や學者については到底書きつくせないから、ここではバイエルンを中心とした全くの概観をおしらせすることにしたい。

その前に、ごく一般的な動向について一言しておきたいことは、いろいろの研究があるにも拘らず、戦後西獨史學界の主流は、いわゆる „geschichtliche Landesforschung“ (地域史研究) の徹底化にあるという点である。法制史も經濟史も、政治史も文化史も、こぞってこの方向に最大の関心をしめしているようにみえる。

先日私は、今日における西獨中世史學界の巨匠ともい

べきテオドール・マイヤーから手紙をもらったが(マイヤーとの會見記はいずれ後日にまとめてみたい) その書き出しはつぎのようなものであった。

「貴君がドイツの地域史研究の方法に非常な興味を抱いているのを知って大變うれしく思いました。私達は、私達の民族の歴史の新しいビルトを得ようと努力しているのです。今までの古い研究は、フランス革命以来の、ドイツについては特に19世紀にでっちあげられた法制の諸形態というものをば、いつの時代にも、どこにでもあてはまる模範であるかのような錯覺と先入主をもって、過去の史實を測定してきたのです。これでは到底過去の正しい姿と意味とをつかむことはできません。私達は地域史の総合的研究ということにお互いに協力し、單に古い研究を變えるだけでなく、過去の事實についてのよりよい、より眞實なビルトを描きだそうと念じています。これは私個人の念願ではなく、私のところに集っている有能な若い人達の共通の願ひなのです。これを積み重ねることなしに、新しいドイツの歴史は書き直せまん。……」

この書簡は、私が数千語を費して説くよりも、一層卒直に今日の西獨史家の共通の関心を示しているのではなからうか。もちろん、ウィーンのヘールのような革新的著作を矢繼ばやに出す歴史家もいるし、ヨーロッパとは何かといった議論も盛であり、特にドイツではギリシャ史に関する新著が非常に多いように思われる。にも拘らず私は、やはりこのマイヤーのような立場を、ドイツ史における主流であるといいたい。そのことは、マイヤーのところに集るいわば常連ともいべきつぎの人々の顔ぶれを見ただけでも納得できる。すなわち、H. Dannebauer, J. Werner, E. Schwarz, K. Lechner, W. Schlesinger, H. Fehr, K. Bosl, E. Klebel, B. Meyer, K. S. Bader, O. Brunner, W. Weizsäcker, R. Heuberger, H. Büttner, E. E. Stengel, F. Beyerle, R. Buchner, H. Jänichen, W. Mitzka, H. Beumann, E. Ewig, O. Höfler……等々。私はこれらの人々が毎年9月末か10月初め、マイヤーのいるコンスタンツに集り、ポーデンゼー湖畔のマイナウの古城で夜を徹して報告し議論するいわゆる „Mainauvorträge“ (1952年以降毎

年開かれている)の盛況を想い、その報告書であるあの „Vorträge und Forschungen“ 各巻の論調を読むとき、マイヤーの念願が着々とみのりゆたかに實現されつつあるのに驚かざるを得ない。それはもはや、單なる地域別個別研究といった域を脱しつつあるもの、ないしは、より正しい総合に窓をひらいた研究という感じである。今年73歳のマイヤーの情熱たるや、まことに驚くべきものがあり、またその人柄には頭のさがる思いがする。

この1例でもわかる通り、ドイツの各地域史の基本的な研究は、いまだしどしと刊行されている。方法上の議論やむずかしいイデオロギーの問題はしばらく措き、西獨史家は少くとも表面上、何のためらいもなく、非常な自信と誇りとをもって地域史の総合的研究に邁進しているように見える。この勢いのおもむくところ、必ずや近い将来に、それこそ文字通り新しく書き直された「ドイツ史」が誰かによってまとめられるであろう。「歴史の書き直し」ということが、厳格な意味で、どれほど辛苦に満ちた豫備的な基礎工事を必要とするかを、私はいまいたるところで見せつけられている。そして、1人で大向うをうならせるような「新しい」概説書を書くことが、いかに學界というものを無視した暴舉であるかを、しみじみと感じさせられた。

いま試みに、ここミュンヘンの1例をおしらせして、具体的にそれが如何に大がかりな仕事であるかの一端をしめしてみよう。

先日、私は勇氣を出してバイエルン學士院の附屬機關であるアルキスシュトラーセ12番地の Kommission für Bayerische Landesgeschichte. をおとずれ、その所長であり、またミュンヘン大學の Institut für Bayerische Geschichte. の部長でもあるマックス・シュピンドラー (M. Spindler) 教授を訪問した。63歳だという教授は、色つやのよい顔で、私などよりは若くみえる位である。それが2人の助手と一緒に、實に親切丁寧に仕事の内容を説明してくれた。話はいろいろの方面に及んだが、それはとにかくとして、ここでは、この研究所の主要な業績だけを報告したい。ちなみに、シュピンドラーはあの有名な古典的名著 M. Doeberl. *Entwicklungsgeschichte Bayerns.* の第3巻の編纂者であり、目下あれの第1巻の徹底的な改訂の仕事をやっている人であり、バイエルン史、特にその近世史についての著作、論文がきわめて多い。

さて、まずこの研究所ではつぎの2つの雑誌を出している。その一つは *Bayerische Vorgeschichtsblätter* であり、もう一つは日本の一部にも知られている *Zeitschrift für bayerische Landesgeschichte.* である。前者

はいうまでもなく考古學中心のものであり、民族大移動期の遺跡等について、すぐれた研究がのせられている。これは、以前は *Bayerische Vorgeschichtsfreund.* とよばれた雑誌をうけついでのものであるが、今では名をかえて年刊のかたちで出されている。後者の刊行は非常に活潑で、1928年に創刊されてから、年に3冊ずつ出され、今では第19巻の第1號が出ている。敗戦後5年間ほど刊行を停止しただけである。いうまでもなく、バイエルン地方史についてのすぐれた研究はこの雑誌にのり、この附録にはバイエルン關係の文献紹介と目録が精密につけられている。

雑誌について史料および研究叢書が並行して出されている。それは大きく分けて4つの種類となる。

第1, Quellen und Erörterungen zur bayerischen Geschichte. Neue Folge. これはもと1856年に第1巻をだした叢書の後身であり、Neue Folge で1945年以後に出たものだけを挙げるとつぎのような重要なものがみられる。

Bd. 9. Die Traditionen des Klosters Tegernsee 1003—1241. bearbeitet v. P. Acht, 1952.

Bd. 10. Die Traditionen des Klosters Schäftlarn 760—1305. bearbeitet v. A. Weissthanner, 1953.

Bd. 11. Die bayerischen Luitpoldinger von 893—989. Sammlung und Erläuterung der Quellen vom K. Reindel, 1953.

Bd. 12. Das deutsch-englische Bündnis von 1335—1342. bearbeitet v. F. Bock. 1956.

第2, Schriftenreihe zur bayerischen Geschichte. これは1929年からはじめられた研究書であるが、今日まで大小まちまちの(大體150頁から700頁位まで)研究が55巻出ている。中には近世史のものもあるが、中世史關係も多く、教會・修道院の所領管理や貴族の地盤ウアバル等を扱った個別研究がたくさん目につく。1945年以降既に17巻もだされている。

第3, Bayerische Rechtsdenkmäler. これは主として都市法の史料集という方針で編纂され、今のところ2巻刊行されただけである。しかし、ミュンヘンとノエルドリンゲンの都市法が完全なかたちで公刊されたことは大きな意味があろう。

第4, Monumenta Boica. これはあまりにも有名なバイエルンの史料集である。その第1巻の刊行は、モヌメンタ・ゲルマニアイ・ヒストリカよりも古く、1763年にさかのぼる。一般の書物とは型が少しちがって、たてよこが同じ長さの書物であるが、今日でも200年の傳統を守りつづけ、そのままのかたちで刊行されている。



今まで刊行されたのは、第1巻より第50巻までと、第53巻、第60巻の計52巻であったが、ごく最近その第54巻 Regensburger Urkundenbuch, 2 Bd., Urkunden der Stadt 1351—1378. bearb. v. F. Bastian u. J. Widemann. が出た。いま出来て来たところだといって、シュピンドラー教授がうれしそうに私にみせる顔は、ほんとに輝いていた。いうまでもなく、彼が全體の監修者である。私はこれを53巻全部あつめてみようと思つて古本屋をかけめぐっているが、戦禍のひどさは到底私の念願をかなえてくれそうにない。残念な話だがまだ端本3巻を買っただけである。そしてあまり高いので、この頃はもうこれを集めることを断念した。

以上は、この研究所がアカデミーからうけついで昔からの仕事であるが、最後に是非紹介したいことは、現所長シュピンドラーがはじめた素晴らしい大がかりな仕事についてである。そしてこの新しい部門が實は最も活潑であり、また、その意圖があたかも「地域史」の徹底的研究に、最も大きな貢獻をなしている。すなわちそれは2つの部門に分れている。

その1つは、Historischer Atlas von Bayern. である。これはその名のような地圖ではなく、ナポレオン時代より今日のゲマインデに至るまでの全バイエルン（今日の）の裁判・行政・經濟などの變化を、裁判區中心に分析したものであり、その前史の敘述も、場所によってはフランク時代にまでさかのぼる。周知のように今日のバイエルン領域は、フランケン、シュワーベンをも含んでいるから、アルトバイエルンを合せて三大地域のしらみつぶしの研究となっている。そして、1950年に第1巻を出したこの仕事は、今日までにつぎのように多數に刊行されている。

アルトバイエルン—9巻、フランケン—5巻と別冊3巻、シュワーベン—1巻、計15巻と別冊3巻。

これはいずれも大版で、各巻には10萬分の1の附圖がついており、大きなものは200頁を越えるものがある。私はZSRG. やHZ. の書評でこれが出ていることだけは知っていたが、こんな大がかりな企畫とは思わなかった。また、まことにうかつにも地圖だろうと考えていたのである。シュピンドラーの話によると全部で80數巻になるが、ここ6,7年の間に完成する豫定だとのことであつた。もとより多勢のミットアルバイターによる仕事であるが、バイエルン史研究の意氣込みに頭がさがった。

いま1つは、Historisches Ortsnamenbuch von Bayern. である。これは、バイエルンのあらゆる Ortsnamen, Flurnamen 等々を、歴史的・言語學的に解明し、個々の地名の出てくる史料集を註記しようとするもので、

刊行方式は前者同様、3地區に大別され、並行して出版されている。前者が裁判區を中心とし、近世に重點を置くものだとするならば、こちらは、ジードルンクや開墾の歴史を知る中世史研究の寶庫であるといえる。既刊はバイエルン1巻、フランケン1巻、シュワーベン2巻であるが、エアランゲン大學のフォン・グッテンベルク (Erich Freiherr von Guttenberg) がまとめあげたオーベルフランケンの „Land-u. Stadtkreis Kulmbach.“ 1952. の如きは、大版320頁、80頁にあまるフランク時代よりのジードルンクの敘述は、私が今まで讀んだどの書物よりも具體的である。シュピンドラーはこのグッテンベルクの業績をたたえながら、彼がごく最近亡くなったと話し、「惜しい仕事の上での親友を失った」と暗然としていた。私はこんなものが、バイエルンだけで何十巻と出るのかと思うとうんざりしたが、その學問的雰囲気と心をとりもどし、助手にこっそりと大幅に割引してもらって、既刊書をかかえて研究所を辭した。シュピンドラーはその包みを見て、誇らかに微笑していた。

バイエルン史學界の最近の情勢をのべるためには、なお多くの人達について語るべきであろう。例えば、ミュンヘンのブリヴァート・ドツェントからヴェルツブルクの正教授となったカール・ボスル (Karl Bosl) — 彼はまだミュンヘンに住んでいて、汽車でヴェルツブルクへ通っている — のあの2冊ものの『バイエルン史』とか、ミュンヘン大學が中心になって、毎年ホッホシューレの歴史教師達に講習會をやった時の講演集 “Unser Geschichtsbild.” (既刊2巻) とかについて、語るべきことがきわめて多い。しかし、あまりミュンヘンのことばかりを報告したのでは變なものであるから、もう少し北ドイツやオーストリアの學界をみてから、比較の材料を得たあとで、ゆっくり自分の考えを述べてみたい。今日は最も活潑な、また財政的にも最もめぐまれたミュンヘンの歴史研究所の1例を報告することで筆を擱きたい。

研究所を辭して街に出ると、その隣りに爆撃の被害も痛ましい古びた建物があつた。入口は立派に修理され、鹿とライオンか何かのブロンズの像が立っているが、まことに古い建物である。こんなところ、一體何だろうと思つて、私はその正面に近づいてみた。すると、鹿の像の下につぎのような文字が印されてあつた。“MONUMENTA GERMANIAE HISTORICA.”……私は重い書物の包みをかかえて、非常な感動をおぼえつつ、しばらくその前にたたずんだ。そして喰い入るようにこの27字のスペリングを追つた。「ドイツの歴史學は生きている」という一種の安心と尊敬の念に満たされながら……。

(1956・6・17 ミュンヘンにて記す)